現代集合住宅における暮らしの実態に関する研究

- 建築写真を方法論として-

K08041 川口聡太

Keywords

空間 モノ 暮らし プラン ブリコラージュ システム 写真

1. 研究背景·目的

家族の暮らしは時代とともに変化する。家族は社会という集合体の一部として成り立ち、社会もまた家族から派生する個人の集合体として成り立っている。社会との関わりによって人々は変化を享受し、また自ら変化を望む。社会と人の関係は鏡のようなものであり、家族もまた同じく社会と対となる関係にある。

現代の日本は消費社会であって、モノに恵まれた時代である。住居にはさまざまなモノがあり、それらは人となり、しいてはそこに住んでいる家族を象徴する。一方でモノは、所属する社会集団と密接な関わりを持つ。人々はその社会から影響を受け、それがモノにも影響を与え、住居は属性を持つモノでいっぱいになる。つまり個々の住居を調べ、その家族と交流することで、現代の家族と社会の関わりについての現状を知ることができるのではないかと考えた。

本研究では、人々が生活しているなかで、暮らしを豊かにするためにおこなっている創意工夫を、広義のブリコラージュとする。家族が日々おこなっている工夫を知ることは、住居と家族の関係において重要であると考えられる。

一方でブリコラージュをおこなっても、暮らしが豊かにならない場合もある。つまり設計自体に改善する点があることも考えられる。住居はエンジニアリングというブリコラージュとは違った概念で造られている。よってブリコラージュの実態を知ることが、エンジニアリングの結果をも浮き彫りにし、暮らしの実態把握に大きく貢献すると考えられる。

本研究では実測調査を通してあきらかになった住居の 実態を抽出し、現代社会における家族と住居の様態を分析し提示する。同時に現代住居におけるブリコラージュ の可能性を探求し、暮らしを豊かにする方法を模索する。

2. 研究方法

本研究では、フィールドワークを基本とした、現地での実測調査をおこなった。

調査期間:8/18~11/13

研究指導:清水郁郎 准教授

調査地:豊洲近郊を中心とした深川地区(一件のみ駒 込周辺)計13件 また、調査家庭には『都市の集合住宅に暮らす、小学生の子どもを持つ核家族世帯』という条件をつけた。

調査項目を以下に記す。

2.1 実測による平面図の作成

まず各住居の間取り、実際に配置されている家具やモノを記入する。次に、各部屋に対してコンベックスを使用しそれぞれの寸法を取る。実測データを元に平面図をCAD化し、それにモノを書き込む。最後に墨入れをおこない、1/50の清書図面を作成する。

2.2 調査家族へのインタビュー

インタビューは調査日に在宅している家族に対しておこなった。事前に作成したインタビューシートの項目に沿って、話しながら質疑応答をおこなった。大まかな項目は以下の3点である。

- ① 家族のタイムスケジュール
- ② モノに関しての質問
- ③ 住居空間に関しての質問

2.3 写真撮影

本研究では写真を最も重要な方法論と位置づけている。 そこで、分析精度を上げるために、写真撮影についてい くつかのルールを設定した。

- ① 水準計を使用し水平垂直を出して撮影する
- ② 全ての壁面(立面)を撮影する
- ③ パンフォーカスで撮影する

①は写真のパースの歪みを最小限に抑えるためである。 各調査家庭の内観写真の形式を統一する為、レンズは状況に応じて、同じものを使用するように努めた。

②は考察の際、内観写真に抜けや漏れがないようにするためである。一つの部屋を撮影する場合、最低3枚、角度を変えて撮ることで要件は満たされる。

③は写真の全ての範囲にピントが合っている状態のことを指す。写っている空間・モノを分析の対象とする場合、ピントが合っていない範囲について述べることは写真の特性上難しいためである。

その他清書図面用のモノの写真、住居空間を象徴する 写真、家族の生活をあらわす写真などを適宜撮影し使用 する。これらの写真は、上記したルールは適用されない。



写真-1 共通項分析用写真(リビング)

2.4 分析方法

本研究では、空間・インタビュー・写真の3点を分析に使用する。そこから章ごとに、空間・モノ・暮らしに着目して分析を進めてゆく。

分析において写真を主体、もしくは参考材料として使用する場合、感覚を取り除いた視覚的分析のみをおこなう。雰囲気や感じといった感覚的な要素を排除し、空間について述べる場合は空間のみ、モノについて述べる場合はモノのみと、事象について単一に見てゆく。さらに分析方法にも一定のルールを適応する。

- ①共通項の分析をした場合、全ての住居の写真を使う
- ②事例の特徴となる写真に、注釈をつける
- ①に関しては、全13件分の写真を一様に並列させて 使用する。その際、共通項として挙げられた分析に沿っ た写真を一律に使用する。

②に関しては、撮影した意図について注釈することを 意味する。つまり、その写真がどういった経緯で撮られ たものかを判断する材料を提供することである。

3. 空間分析

3.1 リビング

全住居のリビングには①テレビ②ソファ③座卓のテーブル④カーペットの4点の家具が少なくとも一点ある。 家具の有無を分類すると、次の特徴を指摘できる。

- A) リビング独立型 (All, Not③) 5件
- B) リビング・ダイニング一体型(Not④)3件

- C) 中庸型 (Not②:③, Not③:④) 4件
- D) その他 (Not①:③:④) 1件

Aは、テレビを軸に、対面にソファ、中央にテーブル、まわりをカーペットが囲んでいる。これらの家具の配置によってリビングでおこなわれる行為が完結し、リビング空間が成立する。テーブルがない場合は、カーペットが閾の役割を担うことでテーブルの代わりとなる(図-1)。

Bはカーペットがなくなることで閾がなくなる。床に連続性が生まれて一室空間となり、くつろぎの空間となる。つまり、リビング・ダイニングを含めた一室空間となるのである(図-1)。

C.Dは家具が欠落することで配置が崩れ、行為が完結しないことからリビング空間は成立しない。以上AとBの8件についてリビング空間を見ると、リビング空間を構成する要素は、テレビ、ソファ、テーブルであることがわかる。

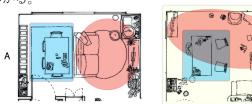


図-1 リビング独立型・一体型の比較

3.2 キッチン

キッチンで最も多い形式は13件中7件で対面式である。 対面式の特徴はキッチンから直接料理を出せることだ。 だが、そのためにはダイニングテーブルを特定の場所に 置かなければならない。したがって7件の住居ではダイニングテーブルを置く場所が限定されてしまう。さらに写

真を見るとキッチンはその空間で完結していることがわかる。行為に関しても調理と皿洗いがおこなわれるのみである。以上から、キッチンは他の空間から独立していることがわかる(写真・2)。



写真-2 キッチン

3.3 LDKの関係性

現代集合住宅では、リビング・ダイニング・キッチンの、それぞれの役割が固定されている。配置がプランニングにより限定され、家具なども用途に合った使い方をしなければならず、結果として特定の行為が個々の空間に縛られてしまう。

3.3 トイレ・バスルーム・洗面所

トイレは全住居において個室である。さらに全てのトイレは廊下とつながっている。そして、その他の空間との関連性はなく、トイレの配置は一様になっていることがわかる。

バスルームは、全ての住居でシステム化されている。 さらに、洗面所とバスルームはつながっており、洗面所 はドアを挟み、廊下とつながっている。それぞれの空間 は、用途が異なる。よって3点の空間は独立している。

3.4 寝室と個室

寝室とリビングの関係を見ると、次の2つに分類できる。

- ① B.L隣接就寝型 No.4,5,6,8,9,10,11,13
- ② B.L隔離就寝型 No.1,2,3,7,12

①は寝室がリビングに隣接している形式だ。全ての住居で布団が使われている。住居によっては布団がしまわれていて、昼間は用途が異なる部屋として使える。②は寝室にベッドが設えてある形式だ。ベッドをおくことで部屋の用途が限定されている。

次に個室の有無について分類する。個室の条件は『寝 室として使われていない特定の用途がある部屋』とする。

- ① 個室有 No.2,4,5,6,8,9,10,11,13
- ② 個室無 No.1,3,7,12

No.2を除くと、就寝形態と個室の有無に一致した相関 関係が見て取れる。

以上のことから、住居において各空間が機能の分化し、 プランニングが固定化されていると考えられる。

4. モノ・インタビュー分析

4.1 収納・装飾のブリコラージュ

No.10では、突っ張り棒収納を使用している。天井まで突っ張り棒をのばし、フックをつけ、モノをつり下げている。モノが立体的にしまえることと、可視化されることでモノの把握がしやすい。これは収納におけるブリコラージュと言える(写真-3)。

表-1 共通項分析用図面(リビング・キッチンの関係)







写真-3,4 ブリコラージュの様子

No.7は、玄関、廊下、トイレ、リビングに一貫した装飾をおこなっている。陶器の置物やガラス細工などが主に飾られている。ベランダには大量の植物が置かれ、リビングでは森林浴ができる。これらの装飾は、全て居住者にとって大切なモノである。これは装飾におけるブリコラージュと言える(写真-4)。

プランニングが固定化されることにより、住居自体への創意工夫はおこなわれていなかった。居住者が住居に対しておこなえる行為は、住居内における創意工夫であり、それが収納・装飾にかかわるブリコラージュである。

4.2 住居の中心

インタビューで『住居の中で、中心だと思う場所はどこですか?』『住居の中でよくいる場所はどこですか?』という質問をおこなった。前者は住居内で心のよりどころとしている場所を知るため、後者は暮らしの中での主な居場所を知るための質問である。二つの場所を『中心だと思う場所』『よくいる場所』とし、分析した。

『中心だと思う場所』を平面図にプロットすると①リビング空間②ダイニング空間に分けられた。①はくつろぎの空間として、リビング空間一室という答えが多かった。②はダイニングテーブルが中心と思うという答えが多かった。

『よくいる場所』では、①ソファ②ダイニングテーブル③リビング空間一室に分けられた。①はリビング、②はダイニング、③はリビング空間一室によくいることがわかった。以上より、二つの質問の答えは、リビング空間一室の中で一致することがわかった。

5. 考察

5.1 プランニングの最適化・固定化

プランニングにおいて各空間が機能の分化を起こし、機能空間として独立していることから、住居のプランニングは機能的に最適化されていることが言える。それぞれの空間が最適化されることにより、住居面積の効率化も図られる。規格化された家具やモノがその住居に合うことは、プランニングが一般化し世の中に広まっていることの裏付けである。よって集合住宅の住まわれ方が確立していることが言える。

一方で、機能の分化による影響で、各空間との関係性において閉塞性が見られる。一部のプランニングの変更をおこなうと、そのまわりの独自性の強いプランニングのことも考慮にいれなければならず、かえって複雑なプ

ランニングになってしまう。さらに規格化された家具やモノがある以上、そのモジュールに合わせなければならず、一層プランニングの変更は難しい。もともと最適化するようつくられ、それに合わせて規格品がつくられた。その背景がある以上は、プランニングを一から創出することは困難であると考えられる。

5.2 創意工夫

現代集合住宅において居住者がおこなっているブリコラージュの多くは、収納と装飾であることがわかった。これは暮らしに豊かさをもたらし、家族の関係を深める行為であると言える。一方、集合住宅自体への創意工夫は見られなかった。あらかじめワクが設定されていることで、工夫の余地がないとも言える。

5.3 中心

質問の答えより、住居の中心がリビング空間にあることがわかった。つまり現代集合住宅では、リビングが中心の役割を担っていて、そこで暮らしが営まれている。

6. 結論

これまでの記述をまとめると、現代集合住宅の特徴は 以下のようになる。現代集合住宅は、住み方、暮らし方 のひとつの完成形である。プランニングが最適化される ことで、居住者が空間自体におこなう工夫が必要なくな った。それと同時に居住者がおこなう創意工夫は住居内 部へと進出し、収納・装飾にかかわるブリコラージュが おこなわれるようになった。人々は暮らしの豊かさを求 めて、収納や装飾をおこない、より暮らしの充実した住 居空間を創り出している。リビング空間が家族の中心と なり、暮らしはリビングを中心として営まれる。

一方で、集合住宅は建築の中でもひときわ規格化された、消費財としての住居であることがわかった。集合住宅はユニットの集まりであり、住居内の空間は規格化されたプランニングで構成され、家具はその空間の配置に最適に設えるように規格化されている。住居内にあるたくさんのモノは、その使用用途に合ったカタチで販売された既製品である。つまりプランニングだけでなく、集合住宅自体も、それに関するさまざまモノも規格品である。住居内のプランニングを変えるには、ハコの外側を大きく変える必要がある。つまり、これからの住居のかたちは、新しい概念を用いて創り出さなければならない。

<u>参考文献</u>

- 1)『家族を容れるハコ 家族を超えるハコ』上野千鶴子 平凡社 2002年
- 2) 『住居論』 山本理顕 住まいの図書館出版局 1993年
- 3) 『51C 家族を容れるハコの戦後と現在』鈴木成文 上野千鶴子 山本理顕 平凡社 2004年
- 4)『TOKYO STYLE』都築響一 京都書院 1993年
- 5)『UNIVERSE for RENT』都築響一 筑摩書房 2001年
- 6)『野生の思考』クロード・レヴィ=ストロース 1976年